
透析専門病院における肺炎、敗血症の検討～原因菌および薬剤感受性からの検討～

医療法人衆和会 長崎腎病院 長崎腎クリニック

○原田孝司 佐々木修 一ノ瀬浩 澤瀬健次 橋口純一郎 船越 哲 高園貴弘

【目的】

血液透析患者の死因の約4割は感染症に起因している。これらの感染症について調査・解析し、その対策法を検討する。

【方法】

2016年1月～2017年10月までに当院において肺炎および敗血症を発症した症例を対象に、後ろ向きに原因菌や薬剤感受性、予後について調査した。

【結果】肺炎は介護関連肺炎もしくは院内肺炎であった。喀痰分離菌 116 株の解析では、緑膿菌が 16%と最も多く、次いで MRSA (14%)、大腸菌 (12%)、*Stenotrophomonas maltophilia* (9%)、肺炎桿菌 (8%) であった。なお、緑膿菌の 17%がカルバペネム耐性株であり、大腸菌の約 57%が ESBL 産生株であった。また、敗血症は 42 例あり、原因菌は MSSA が 22%と最も多く、次いで MRCNS (17%)、大腸菌 (17%)、MRSA (12%) であった。

【考察】

血液透析患者では耐性菌感染症の比率が高く、抗菌薬投与前の培養検体の採取および適切な初期抗菌薬の選択が極めて重要である。